

地域医療連携広報誌

つながる医療

特集インタビュー

高木 公暁 医師

たかぎ きみあき

大雄会第一病院
泌尿器科 診療部長

【主な資格】

- ・日本泌尿器科学会認定
泌尿器科専門医・指導医
- ・日本透析医学会透析専門医
- ・日本がん治療認定医機構
がん治療認定医
- ・Da Vinci Console Surgeon
- ・臨床研修指導医



前立腺がんは、早期であるほど治療の幅が広がります。

泌尿器科 診療部長

高木 公暁

泌尿器科のアピールポイントを教えてください。

泌尿器科診療の柱であるがん診療は、日々アップデートを行っております。2022年2月より手術支援ロボット“ダヴィンチ”が稼働しました。現在主に前立腺がんの患者さまを対象に症例を重ねております。今後上部尿路がんへの適応も順次拡大していく予定です。がん薬物療法にも力を入れており、新規レジメン（薬剤の用量や用法、治療期間を明記した治療計画）も積極的に取り入れ、個別化医療を実践しています。がんの制御のみではなく、機能温存にも配慮した治療選択、診療を行っております。

前立腺がんについて教えてください。

前立腺がんは、男性のみにある臓器『前立腺』にできるがんです。

病気の進行が緩やかで放置しても寿命に影響を及ぼせないタイプのものや、進行が速く早期治療を行わなければ命にかかわるタイプのものもあります。

病気の段階（ステージ）やがんの性質によって、適切な治療法は異なってきます。そのため検査によってしっかりと診断して、適切な治療を選択していくことが重要となります。

前立腺がんの検査には、健康診断でよく使われるPSA検査や直腸診で前立腺を触診する検査、前立腺の組織を採取する針生検などがあります。

前立腺がんの発症要因としては、一般的に年齢と家族歴と言われております。前立腺がんの患者数は50歳代から徐々に増え始め、60歳代から急増してきます。また、すべての前立腺がんが遺伝によって発症するわけではありませんが、前立腺がんの家族歴は前立腺がんの発症リスクを高める因子であることが分かっております。複数世代にわたって前立腺がんを発症している場合や、若年者の近親者が前立腺がんを発症した場合などは、通常よりも若い時期から健康診断などでPSA検査を受けることをお勧めします。

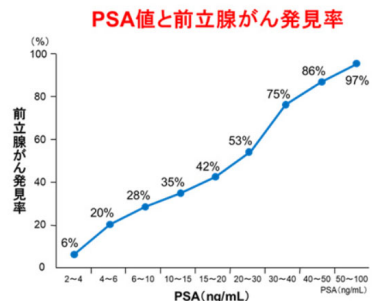
前立腺がんの主な自覚症状として排尿障害や腰痛などがあります。しかし初期のがんではほとんど無症状なので、自覚症状によって気づくことは難しい病気と言えます。

PSA検査について教えてください。

PSA検査とは、採血をして前立腺から出る前立腺特異抗体：prostate-specific antigen(PSA)という物質を調べる検査です。

一般的に健康診断で検査を受けることもでき、自覚症状がない段階で前立腺がんを発見する初期の検査と言えます。

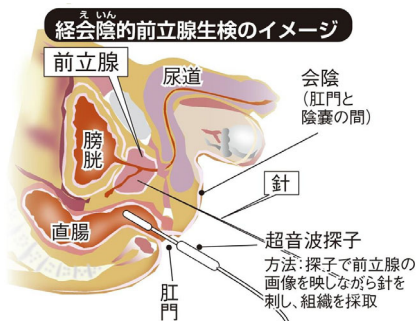
PSA検査の値はがんだけでなく、前立腺肥大症や前立腺炎でも上昇しますが、前立腺がんの初期の診断として有能な検査となります。



出典：（財）前立腺研究財団編：前立腺がん検診テキスト

当院の前立腺がんの診断について教えてください。

かかりつけ医での検査や前立腺がん検診でPSA値が高く受診される方が多いです。直腸診、超音波検査、前立腺MRI検査などを行います。それらの結果から前立腺がんを疑う場合は、組織学的診断のために前立腺生検を行います。当院では腰椎麻酔(下半身麻酔)下に経会陰的前立腺生検を行っています。1泊2日の入院検査となります。検査後に一時的に血尿が出ることがありますが、多くの場合自然に軽快します。また、麻酔をかけるため検査に伴う痛みもなく安全な検査です。



ダヴィンチ手術について教えてください。

当院においてもDa Vinci Xi (ダヴィンチサージカルシステム) が導入され、2022年2月10日に一例目のロボット支援腹腔鏡下前立腺摘除術を行いました。

ダヴィンチを用いた手術に関しては、最大のメリットは『出血量が圧倒的に少なくなったこと』です。出血量は手術後の患者さまの体力の回復に大きく関係してきますので、出血量を少なくできることは患者さまにとってとても重要なこととなります。また、ダヴィンチは鮮明な高解像度、高倍率の3DHD画像を見ながら手術することができ、ダヴィンチの鉗子は人間の手より大きな可動域と手振れ補正機能により精微な手術を行うことができます。これらの機能により細かく的確な縫合をすることができ、従来の手術と比べると神経や尿禁制、性機能などの機能温存の精度が高くなり、術後の回復も早くなります。患者さまにとって、ダヴィンチを用いた手術を行うことによるデメリットは、特にないと思います。



ワンポイントアドバイス

前立腺がんは早期であるほど治療の選択の幅が広がります。たとえ診断時に進行がんであっても、多くの場合、薬物療法が奏功します。病状、ライフスタイルなどを考慮した治療選択を、担当医とよく相談してください。



先生の事をもっと知りたい！

● 医師を志した理由を教えてください。

子供のころから体も丈夫でしたし、大きな病気をしたこともないので、感動的なエピソードは特にありません（笑）。

両親が薬剤師だったため、両親の勤める病院にはよく行っていました。そんな環境だったので自然と医療の道をめざすようになりました。泌尿器科の医師になったのは学生時代に実習に行った病院の泌尿器科に、サッカー部の先輩がいたことがきっかけです。最初から泌尿器科医になるつもりでその病院の研修を希望しました。

● 診察の際、大切にしている事を教えてください。

話をするときには、なるべくパソコンを見ないようにしています。患者さまやご家族さまのお顔を正面から見て話をするように心がけています。泌尿器科の患者さまはご高齢の男性の方が比較的多い傾向にあります。説明する時は、なるべくご本人だけにしないようにご家族さまにも同席いただいて、わかりやすい言葉を用いて説明しています。不安を少しでも取り除けるように、外来・病棟スタッフ全員でフォローしています。

● 今までで特に印象に残っている症例を教えてください。

具体的に症例をあげることはできませんが、やはり医師になって1年目に携わった患者さまのことはよく覚えています。

● 休みの日の過ごし方を教えてください。

スーパーに買い出しに行ったり、庭でやっているプランター野菜を眺めたり、天気が良ければ洗車したり。あまり趣味らしいものがないんです（笑）。出かける機会も減ってしまったので、運動不足は否めません。たまに家の前で縄跳びをやっていて、子供と二重飛び何回連続で飛べるか競争してます。結構回数伸びてきています。



にんにくとれました。

詳しくは、地域医療連携室までお問い合わせください

